

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

14 大地をとぶイヌ

第十四日め（三月二十九日）

きのうの騒ぎは、きょうの疲労。どのゲルも起床時間がいつもより遅い。朝のお茶をすませてから、母子とりの作業にはいる。午前七時半。

きのうは羊人ソヨルトもウマのたてがみ切りにしばらくのあいだ参加した。たてがみ切りの作業をしているあいだ、三頭のヒツジが放牧地で出産した、という。確認されてはいたが、ヒツジの群れ本隊から母子群へとひきはなさなかった。いまままだ、群れ本隊のなかにいる。けさの母子とり作業では、昨夜から今朝にかけて出産した母とその子をわけとるばかりでなく、きのう放牧地で出産した母とその子もわけとらなければならない。

そのために、母子とり作業がいつもより大変になるだろうことを、人びとは予測していたのかもしれない。朝の作業に、全員総出。ウルジーチンゲルは、手にオールガをもって参加。ウネルバヤン、二人の嫁、モージ母、ホクシン・エージ母、エルデニチメグ姉。それから、わたし。

まず、群れをみまわる。いつもどおり。つづいて、群れのなかにはいつて子をひろおうとする。いつもどおり。まだからだのぬれている一匹の子ヒツジをまずウネルバヤンがひろい、これを妻のセルゲレンにわたし、彼女が子ヒツジをみせながら、一頭の母ヒツジをへレムにいった。これが、けさがた出産

したもの。いつもどおり。ところが、あと三匹いる子ヒツジをひろうことができない。子のはしりまわる。母と一緒にしりまわる。群れ全体がうごく。うごく群れのなかに、子と母が姿をかくす。まるで、群れを障害物にした、母子ヒツジと人との追いかけっこ。障害物になる群れは、あきらかに、つかまえるようにする人よりも、にげるヒツジたちに有利だ。

そこで、全員で群れをとり囲んだ。輪のようになって囲む。といっても手をつなぐほどではない。ならぶ八人の相互距離はおよそ十メートル。もちろん正確な円形でもない。とりあえず、群れのまわりを囲む格好になってはいる。みんなで囲みを小さくする。群れをなるべく小さくまとめる。それから、子ヒツジのいるところに人がわけいっていく。群れ全体がうごく。一部の群れは、全体から切れて人のつくる囲みをでていく。かこみをでていく部分には、つかまえるべき子も母もないようにする。捕捉すべき対象がいないうちに、人の囲みを脱出させる。捕捉すべき対象がまぎれこんでいるときには、全身で群れの移動を阻害する。両手を大きくひろげ、左右にからだをゆすって、ヒツジたちのじゃまをする。人のつくる囲みのなかには、どんどん少なくなっていく。やっと、子ヒツジをとつかまえる。さらに、ウルジーチンゲルがウマとり棹でひっかける。オールガの威力は強力。二匹の子ヒツジをモーシ母がうけとって、子おとりの要領で母ヒツジを誘導する。最後にのこった母子ペアは、子のはしりまわるだけではなく、母のほうに子をしたがえる様子がない。強力な威力を発揮するオールガで、まず母ヒツジをつかまえる。これをエルデニチメグ姉がわしづかみにする。ヒツジの後足の一方をもち、ヘレムまでひきつっていく。その子ヒツジは、やはりオールガで引っかける。これはサラントヤーがうけとる。ホクシン・エージは捕捉すべき対象がふくまれていない群れの一部をどんどん追う役。

こうして母子とり作業が終了した。だれが命令するわけでもないのに、みごとにまでの連係プレイ。計算されたかのような一人一役。最後まで「人垣」に徹したわたしも、十分役にたったというわけ。三



ジャーとよばれる骨をもちいてあそぶ

十分ほどのできごとであった。時計ではかる時間以上に、長いときをかけたような気がした。まだまだ、寒いせいかもしれない。

けさの作業の困難さは、子が誕生直後でないところに端を発している。昨日放牧地で誕生した子たちだ。まだ一昼夜経過していないのに、あの活動ぶり。子をひろえない状態であった。「母子とり」という作業が容易に成立するためには、まず子が誕生からまもないときでなければならぬことを、けさのエピソードはしめす。

午後、南家のリンチェンドルジ兄さんがバイクにのって来訪。肩には鉄砲をかついでいる。モージ母さんとしばらく世間話をする。鉄砲について、わたしに説明してくれる。

「ソムの鉄砲なんだ。きのう、借り出してきた。これ、ほら、証明書。昔はみんな自由にもてたんだけどね。わたしももってた」

それから、話は少年時代の狩のことに飛躍した。十年ほどまえはもつと草丈の高い草原であったこと。そのころはゼールとよばれるカモシカが群生

していたこと。十月から十一月にたくさん狩ったこと。近年、発砲事故があいつぎ、それ以来私有の鉄砲はすべて没収されたこと。ソムには、オオカミ退治のために鉄砲が確保されていること。いろいろはなしてくれたが、いま、なぜ、鉄砲をもっているかについては、はなしていない。

やがてリンチェンドルジ兄さんは鉄砲をもってゲルを出ていった。すると、まもなく、パン、パン、パン、パン。四発の銃声。ゲルにのこっていたウネルバヤンは、わたしと目をあわせ、顔をしかめながら、いう。

「ああああ、殺しちゃった」

「え？ なにを」

「あのイヌだよ」

二匹の子ヒツジの母を追いはらった犯人ときめつけられた例のイヌ。悪事のはてのあつけない最期。死体はどこにかたづけられてしまった。すっかり暗くなつてから、放牧からもどつたソヨルトが、穴をほり、イヌの死体をうめた。あのイヌにだって本来の所有者がいたろうに、勝手に殺してよいものなのだろうか。

そもそも、モンゴルには、いわゆる牧羊犬はいない。人とともにヒツジの放牧につきしたがうイヌはいない。モンゴルのイヌは、つねに家の周辺にいて、夜はオオカミを撃退し、昼は訪問者を威嚇する。シリンホト市内からダンゼン家への道中、4WD車に並走する、あのイヌのように。そして、家畜には危害をくわえぬよう、子イヌのときからしつけられている。ソヨルトは、殺されたイヌのことを

「シャル・ノホイ」

といった。直訳すれば黄色いイヌ。黄色という色に、バカヤロウという意味もこめられているようだ。ソヨルトによれば、



子どもたちと筆者

「ヒツジを追い、ウシを追うようなのは、子イヌのときにちゃんとしつけられなかったからだ。そんなイヌは、だれにとっても必要ない。放浪するイヌなんて殺してもかまわない。主人の許可など必要ない」

母をなくした子ヒツジのまさに所有者であるか
れの意見は、少々わりびいて聞く必要があるう。

しかし、イヌたち自身にとっても、あんなバカな
やつはゆるせないのではないだろうか。イヌの名
誉をそこなうではないか。

バカヤロウなあのイヌは、実際に黄色い毛並で
もあった。全身がうすい茶色であった。モンゴル
のイヌは本来、全身が黒褐色で、目のうえに茶色
の毛があつて四つ目にみえる。そもそも黄色い毛
並が、モンゴルらしからぬイヌであつた。

エルデニチメグ姉さんが、名犬物語を話してく
れた。モンゴルのイヌのために、名譽挽回しよう
としたのかもしれない。そうすることで、問題の
イヌの屠殺を正当化しておきたかったからかもしれ
ない。オオカミをつかまえる名犬の物語。オオ

カミと口にだすと、本物のオオカミがあらわれるとされる。オオカミと口にするのがタブーなので、オオカミのことをイヌといいながら、話す。

「わたしの養父には、二匹の名犬がいたのよ。ブルゲドとハンガルよ。ブルゲーとよんでいたわ。ブルゲドは、一年に百頭ものキツネをつかまえる優秀な猟犬。ハンガルは子イヌの頃からイヌ（オオカミ）をつかまえて有名なイヌだった。はじめは、自宅のヤギをつかまえて殺してしまったんだって。それで父は怒ったわよ。もんのすぐくぶったんだってさ。でも才能もみとめた。ものをつかまえる血統だ、とみた。父はつないでにおいて、幾日もなにも食べさせなかったらしいわ。そうやって、苦勞を知るわけよね。狩りにいくときには、ブルゲーを師として、子イヌのハンガルをつれていったら、イヌ（オオカミ）をつかまえたじゃないの。子イヌでありながらよ。それで有名になった。でも、やがて自転車にのった公社の人を噛むようになってね。それで毒をもられた。もともと、このイヌには人は手をふれないのよ。ある朝、母が天窓の覆いはずしながら、家の脇で死んだように寝ているイヌをよんだの。寝ているように死んでいたの」

ところで、ブルゲドはハゲ鷹、ハンガルないしハンガルトは鳳凰。名犬にあたえられた名前はいずれも鳥の名である。北家のイヌはホイログと命名されていて、これも鳥の名前であるらしい。ただし、東部モンゴルにいる鳥で実際にみたことはない、という。鳳凰もみたことのないはずの鳥の名である。ほかに、ニスゲーという名のイヌもかつてここで飼われていたことがあった。ニスゲーとは、ニセフ（飛ぶ）という動詞から派生しており、飛ぶものというほどの意味であろう。やはり、鳥の名に類似している。ここにすぎらず、どこへいっても、モンゴルのイヌたちはたいい鳥の名でよばれている。まわりに住む人びとのイヌの名前がすべて同一であったりする。

どうして、かくもモンゴルのイヌはすべからく鳥の名をもっているのであろうか。リンチェンドルジ

兄さんの意見では、

「見たことがないけどホイログとかハンガルトなどの肉は、狂犬病に効くという。こういう名前にしておくと狂犬病にかからないのさ」

そういう民俗的な説明よりも、わたしには素直に、大地を飛ぶようにはしるイヌの姿が鳥に似ているように思われた。ただし、その鳥はけっして群れをなさず、愛らしい小鳥たちでもなく、渡り鳥でもない。猛禽類のイメージである。もしかすると、狩の助っ人役として、鳥とイヌとが対応しているのかもしれない。

鷹狩の鷹のように、猟犬は狩で活躍する。いわば狩の道具である。イヌは、五畜すなわち家畜の概念にふくまれない。野にすむイヌであるオオカミが家畜を狩りにやってきたとき、宿営地にいるイヌがむかえうつ。結果として、家畜をまもることにもなるが、あくまでも、狩りをしかけるオオカミに対して狩りをする。野生のイヌとすむ領域をわけあった関係にあり、宿営地をまもっている。モンゴルのイヌがけっして牧羊犬ではなく、猟犬出自そのままであることを、鳥の名がしめしているのではないだろうか。

さらにまた、イヌにあたえられた鳥の名は、イヌにあたえられた象徴的役割を示唆するかもしれない。狩りというものは、人が野生動物にかかわる介入である。そうした、人と野生界との関係を仲介するものとして、空をとぶトリたちと、陸をとぶようにかけるイヌたちとが呼応しているのかもしれない。イヌは動物版の雑草だといわれている。雑草が、すでに人間の干渉した環境にこそよりよく適応して成長するように、イヌもまた人のつくりだす環境に適応するという。まさにモンゴルでも、イヌたちは人と野生との境界的環境に生きている。

今夜はイヌのはなしをきいているうちに、すっかり遅くなってしまった。